

●連日の旧統一教会関連の報道で、ある政治家が統一教会主催の集会に参加し「自民党が政権を取らないと日本が滅ぶ、一緒に日本を神の国にしましょう」と呼びかけていたと伝えていました。また元信者の話によれば、教団内では日々「神の国実現」のための献金が叫ばれ、借金をしてでも献金するよう教えられていたようです。しかしその現実は一部の権力者による支配、人間の欲望の実現でしかありません。

●この「神の国」という言葉は、聖書に記されている大切な言葉です。マルコ福音書はイエスが宣教活動を始められた時の第一声が「時は満ち、神の国は近づいた」という言葉だったと記しています。マルコ福音書はイエス様の働きにおいて、この「神の国」は大切なキーワードだったことを表しています。しかしそれは人間の努力や献金、奉仕などによってもたらされるものではないのです。

●ある時、律法学者がイエス様に「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか」と尋ねました。それに対してイエス様は二つの教え、「神を愛する事」と「隣人を自分のように愛する事」を挙げられました。注目したいのは、マルコ福音書だけが記しているその後の会話です。律法学者は「その通りです」と言ってイエス様の教えを受け入れましたが、イエス様は彼を見て「あなたは神の国に入れる」とは言われず、「神の国から遠くない」と言われたのです。それはなぜでしょうか。

●この質問をし、イエス様の言葉を素直に受け入れた律法学者は、きっとこの「愛神愛隣」の教えを固く守れば、神の国に到達できると考えたことでしょう。しかしイエス様が「神の国は遠くはない」と言われたその意味は、「彼がもう少し努力をすれば完全に神と人を愛することができるようになる」と言う事ではなく、全く逆で、「この教えを実行しようとするなら必ずや自分が愛に欠けた者であることに気づく。そこで、貴方たちのために命をささげて十字架にかかる私の愛に気付くことになるでしょう。」ということを伝えようとしたのではないのでしょうか。

●私たち人間は自分の力や努力で「神の国」を実現するものではありません。神を愛し人を愛することの難しさを深く知って、嘆き、悔やみ、痛みとうめきを持って神さまと向き合うときに、イエス様の十字架を通して、私たちは神の愛と平安の中に入れられるのです。そこに聖書が教える「神の国」があることを共に覚えたいのです。